

自 閉 児 の 予 後

—ケース・スタディからの検討—

(障害幼児の福祉に関する総合的研究 第4報)

研究第7部 野 田 幸 江

1. はじめに

自閉症あるいは自閉的傾向を持つ子どもに関する研究が緒について既に30年あまりの歳月が過ぎ、その最初の症例報告者である Kanner, L. による当時の症例の30年後の長期予後の報告をかわきりに、その研究方向に様々の変遷をみた自閉症研究も、近年多くの予後に関する研究効果が発表されつつある。

それ等の論文の多くは、予後良好といえるものは、せいぜい対象者の20～30%にすぎず、現段階では自閉症の予後は、当初考えられていた程明るいものでない事を示唆している (Kanner, Creak, Rutter 等の論文になる) と同時に、その状態像の多様性を指摘している。しかし中には就学前期における症状が重かったにもかかわらず、社会的に充分に能力を発揮している症例をあげ回復の可能性について論じているものもないわけではない (Gajzago, C. & Prior, M. の症例報告)。この様に予後研究の結果にかなりの差がみられることは、自閉症研究がはじめられた当初、その診断基準をめぐって種々論争がくり返されたが、今日いまだに一定した基準がないままに、予後が論じられているためであり対象症例の範疇の違いが、予後の違いを招く可能性も多く、今後の自閉症研究の大きな課題ともいうことができるであろう。

学校集団への適応を1つの目標として、暗中模索のうちに、筆者らが、これ等の子ども達の幼児期の治療にたずさわることになって15年がたつ。当時の子ども達も、そろそろ義務教育を終える年頃になり、1つ1つの症例の長期的 follow-up の第1歩として始めたのが今回のこの follow-up 面接である。

筆者らは、自閉症の範疇をめぐる論争が盛んな中で、診断よりも、その子どもの自閉性の寛解をめざして、他への関心を育てるべく週1回1時間の遊戯治療と、日常子どもと接する機会の多い者、主として母親への Counselling を行ってきた。対象は幼児であり、当時治療機関の少なかつたこともあって、時間的な制約から小学校入学を機に週1回の治療から月1回、あるいは問題が起った時のみ母親の相談に応ずるというかたちに移行、今

日に至っているものが、その殆どである。予後の状態が多様であればある程、それを決定するのに大きな影響をもつ因子として、またそこにかかわる仕事をしているものとして、どの様な扱いが彼等によりよい発達を促す刺激となり得るのかの検討を行ないたいというのが今回の面接の第1の目的であった。面接は比較的来所時の子どもの状態がこまかく記録されているもの18名について行ったが、今回はそのうちから今後の自閉児の扱いに大きな示唆を与えてくれると思われる特徴的な3例をここに報告、検討を加えてみたい。

2. 症 例

1) 症例A

本ケースは本児が3才の時、母親がいろいろな所の意見をきく為に歩き廻っていた折、その一環として当相談室を訪れたものである。当時母親の方針は既に決定しており、むしろ二次的な障害がおこった時に考えるという事で相談者も母親の方針を支持、その後折にふれ母親の創意工夫に満ちた扱いを聞くと同時に、子どもの状態像を報告してもらい、相談者の方が教えられる事の多かったケースである。

昭和38年出生、女児、父親は大学病院勤務医。母親は大学心理学科卒業。その他に父方の祖母、第2人の5人家族である。本児は父のアメリカ留学中現地で生まれる。正常出産。その後の発育は順調。しかし生後2～3か月頃から大きな音に対する反応がにぶい事から壁の疑いを持ち、6ヶ月頃よりあちこちのクリニックをまわり歩く。それ以後の事々に耳のきこえを試すような生活が、後になつて考えれば普通ではない親子関係を作り出していた様にも思えるということである。そして11ヶ月になり、現地の壁学校を尋ねた折、その教師より、「この子には訓練しかない。」といわれた事が、それ以後の本人に対する母親の気持ちに大きな影響を持つことになる。

13才になる現在、聴力60デシベルという事で補聴器を使用しているが、物へのこだわり、他との関係のもち方など自閉的な行動特徴も多分に有しており、重複障害と

してとらえてよいのではないかというのが大方の見方である。

2才の時帰国。聾学校に通う。少しでも早×言葉の訓練をと考える母親にとって、まだ小さい事と、耳だけの問題ではない事を理由に人間関係を重視した聾学校幼稚園の教育方針にあきたらず、その後一応小学校入学までは在籍させるが、結局最後の1年半位は通園せず。しかし母親にとって、聾学校での大きい子どもへの訓練を直接見聞した事は、本児の訓練の方法を考えることで非常な参考となったという。

聾学校と平行して都内にある私立の通園施設にも通う。そこでただひもを振りまわしているだけの年長自閉症児を目にした事が、「こんな事をしていたら、これしか出来ない子どもになってしまう」という母親の思いを一層深め、そこには教えるための訓練しかない事を決意させる。

参考までに言葉の訓練の1つの例をあげてみよう。

音を出させるためには、まず音の違いを教えなければという事で、母音である「あ」と「い」の字をカードに書き、大きな声で読んで、それを拾わせる。初めはまったくやる気がなく、いいかげんな事をしていたが、そんな時には容赦なく体罰を加え、時には食事を抜かせる事もあったという。そのあまりの過酷さに家族から非難の声がおこり、それに屈するのを恐れ、家人の留守をねらっては訓練を続けたという当時の母親の言葉は、その訓練の一途さを伝えるものであろう。こうして母音のカード全部が間違いなく拾えるようになったところで、いわせる訓練に入る。そこでは母の口をみる事、それを真似することを徹底的に課題として与え、鏡を使ったり手で口をこじあけたり毎日だったという。一方外出している時でも訓練は続けられ名前を呼んでも振り向かなければ、振り向くまで呼び続けたし、いわれた物を指さしする事が強いられた。ある時は何でも指させばよいとばかりあれこれ指さして母の顔を何う様な事もあったが、課題に応じようとする気持があればそれでも良いと思って続けたという。そのうちに段々と、本人も一旦課題として与えられた事はやらなければ何としても逃れられないという事を洞察した様だし、そうなるとそれ程強制しなくても課題に応ずるようになったという事である。

ただその頃の母は、教えるという事に夢中で、疲れるとか、連続すれば能率が落ちるという事にまでは思いが至らなかつたばかりか、ほめるという気持のゆとりもなく、母としては出来る様になった時も、これだけやつてやっと出来る様になったという気持の方が強かった。しかし家族は、その訓練の厳しさをみていなかった為か、

はじめて本人がアイウエオを口にした時は驚喜し、それを見た本人が嬉しそうに笑うのをみて、始めて賞める事さえ忘れていた自分に気がついたという述懐は当時の母の一途さを物語るものであろう。

こうして一応の成果をあげつつも母親自身、そのやり方にまったく疑問がなかったわけではなく、次々におこる迷い、不安に多くの専門家を尋ね理論的にその方法が間違っていないかをきいて歩いたという。そこには賛否両論があったが、結局、今とるべき方法として自分にはこれしかないということで自分自身を納得させ訓練は続けられる。母親の性格としては、長期的な見通しを持って一旦決めた事はどんな事があっても、その目標に向けて進むべきで、その間に起こるトラブルは目標達成のためにはなにがなんでも、のり切らねばならないものであり、何事も徹底してやってはじめて効果があるものと信じていた。そういう意味で本児に対しても、(1)人のいう事をきく、又きこうとする態度がある。(2)自分の意志が表現できる。(3)他人の役に立つ事のできる人間になる。この三点を本人が自分のものに出来る事が出来た時、本人の一生は楽しいものとなるはずだと思い相手が屈服するまで同じ方法で1つの事を身につけさせようとしている。

手指の関節の曲がりが悪い事もあって、折紙をやらせる事を思いついた時も、母親のこの考えは遺憾なく発揮された。嫌がる事もやがて、解放されたい為のなげやりなやり方に変わる頃には、くり返しを好む性格に裏うちされて折らずにはいられない習慣を形成、やがて熟練して行くようになる。しかし最後まで折りあがりを楽しむという感じはなく、ただ折るという作業を済ませるといふものであったらしい。そのため唯それだけで終わらせてしまわない様、先にあげた目標の(3)に近づける事を考え、弟が生まれたのを幸いおむつをたたむ事を教え、更に洗濯物をたたむ事を教えている。現在も時間があれば母と一緒に施設へおむつたたみの奉仕に出かけているという。

くせになったものは、この様に生活に応用できるものは、なるべく応用させたし、ただくり返しだけを楽しむ様になった時にはそれが熟達した時点で徹底してとりあげ、生活の巾を広げる事がこころがけられている。

この様な生活を送りながら、やはりその時々問題になった事は、自発性の欠如であり、やらせればやるが、働きかけなければ何もせず、指示されるまで待つという生活しかない事であった。しかしそれも普通小学校へ入学、3年生となった頃母からの刺激だけでなく、友達からの刺激を受け入れ、新しい事や新しい言葉を覚えて来

る様になった時、そこまで本人を進歩させて来たことに満足し、自発性のなさもやむを得ないものであったと思つたという。

現在、普通中学2年生であり、全面的に学業について行くという事は難かしく、関係者の間で普通学級へ通学する事の是非が種々論じられている様であるが、本児なりに普通児からの刺激をとり入れ、少しづつでも新しい事をおぼえて行っているという。今回の面接中でも、椅子を指しての「これは英語で何というの?」との質問に「チェア—」と答え、綴りをたずねれば「chair」と答える。

算数も計算をする事では殆ど問題はないが、応用問題となると小学校3年生程度という事である。それも問題を解く力がないというより、文の持つ意味がわからない事の方が多いらしい。例えば「バスに5人乗っていて停留所で3人おりたら何人残っている」という問題があった場合、いくら紙の上で教えても駄目で、まずバスの停留所が何であるか。そこでバスが止まり、客が昇降する事実をみせる事から始めその事実を全部経験させた時、はじめて自分の力で問題をとく事が出来、その手続きを割愛したところでの学習はなかったとさえる事が出来るという事である。

本児の今日あるのは、何も出来ない子どもにだけはしたくないという母親の一念と、それに向ってのひたむきな努力のたまものであるといつて良いであろう。今、本児は家事の殆どを受持ち母親の良い手助けとなっている。しかし先にもあげたようにそこにまったく問題がないわけではない。毎日の決まった事はきちんと出来るが状況に応じての臨機応変な処置をとる事は出来ない。例えば夕方になれば干物をとり入れきちんとたたみ、ボタンのとれてるものはボタンをつけて所定の所にしまう事が出来るのに、急に降り出した雨に自分の判断では処理することができず、落つきを失い、母の命令に、おぼとした様に行動が開始される等の問題を今後どう解決して行くことができるか。しかし母との面接中、課せられた仕事をしている時の真剣な顔。やりとげた後のまわりの大人の賞賛にはころんた笑顔は美しく、忘れられないものであった。

(2) 症例B

このケースは4才3ヵ月の時、当相談室に来所。その後一年の就学猶予の後小学校に入学までのほぼ3年間、週1回1時間のブレイク・セラピーを続け入学を機に家が遠いこともあってセラピーを打切ったケースである。

昭和34年生。男児。家族は中学校教師である父、母、

4才3ヵ月の弟の4人家族。2才頃までは順調に発育。両親ともまったく異常を感じていなかったが、2才を過ぎて子どもに関心を持たないこと、両親のいう事はある程度了解するのに、話すことには進歩がみられず、返事もしない事等から異常を感じる様になり、児童相談所、大学病院等をまわり4才の時「自閉症の疑いあり」と診断されている。

4才3ヵ月の時当所で行った知能テストでは、まったく課題に对应せずテスト不能。ただ言葉はかなり出ていて、その時も「おばあちゃんここに、新宿へ行く、おりんごかくの、お水のむ、お魚たべる」等と話した事が記録されている。セラピー室での様子は、開始当初より絵本をみる、セラピストに絵をかかせる、水遊びもポンカチを洗う等、かなり目的的な動きが多くみられる。ただ思う通りにならないと癪癪をおこし、そうなると容易に気分をかえる事ができず結局は要求を通さねば、その場の収拾ができなかったことが記録に残されている。

3年間の受入れを中心とした関係療法的なブレイク・セラピーを通じて、確かに人に対する関心は増し、自分の要求の実現のための大人は完全に本児の心の中にくみ入れられた様であったが、自分の行動をコントロールする動機としての大人とはなり得ぬままに就学期を迎え、セラピーは中断されてしまっている。一方、母親がついて普通幼稚園の2年保育に通う。といつても集団に参加しているというよりは、ただ遊び場を提供して貰っているといった方が良い程度のものであった。就学は1年猶予、近所に特殊学級がなかったため普通学級に入学。その後3年間母がついて通学。4年生の時、特殊学級に移る。そこでも4・5の2年間はただ学校へ通っているという程度の通学だったが、6年生になった時、積極的な男の先生が配属されたことから以後の1年間は、これまでの小学校生活を通じて一番充実した1年間であったという。当時、本児は母のいう事も良くきいたので結構教科学習的な事も可能で、今にして思えばあまりに勉強に気をうばわれすぎ、他の面での自立への配慮が欠けていたともいえる生活であったようにも思えるという。中学もそのまま特殊学級へすすむ。クラスの人数も多かったためか、教室でスラフラしている事が多くなる。中学2年になり家庭でも何となくイライラしているのが目立つ様になる。同じ様な事でもこちらの話しがけ方が気に入らなかつたりすると、それにつつかり手当たり次第に物を投げ、弟をつきとばす等の乱暴が目立つ。その乱暴が家の中だけにとどまらず、外へ出て泣いている

子どもを見ると突き飛ばす様になり、遂に小さい子どもに怪我をさせてしまった時、その興奮を両親でも静めることができず近所の精神科病院に40日間入院。それ以後鎮静剤の服薬を続けている。

中学3年生になり担任の数が増し先生の目がとどく様になった事と、新任の先生にながれて以来、とてもかなわないと思ったのか、その先生のいう事だけは良くきくらしい。一方、母親のいう事はきかなくなり母の方も入院以後、本人の気持をいらだたせる事に対し極端に憶病になり、特にいう事をきかせようとする気持も少なくなってしまうし、6年生頃には熱心だった勉強も殆どせず、当時がまるで夢の様に思えるとの事である。学校でも学習的な事には殆どのらず教室をフラフラし、作業になって気がむくと、あらかじめ1日の作業量を決め、それだけの量はどんな事があってもやるし、短時間に出来てしまえば後は幾ら促がしても、それ以上には絶対やらないという。

現在の家庭での様子は、母の側へ来て母のやる事をみている事が多い。父親が煙草をすってあれば、「灰を落とせ」とか「消せ」とか側にいて世話をやく、その他は別に何をやるということもなく唯フラフラと歩き回っている。食べたいものは言葉で要求する。

昭和51年3月に家庭訪問。ウーという声を出しながら学校から帰宅。「今日は」と声をかけると、こちらを見る事もなく「今日は」という。うつろな感じ。「誰だか判る」と尋ねてみる。知らぬ顔。母親に色々話しかけられ、やうやくこちらを向き、「わからない」と答える。早くそんな面倒なやりとりから逃れたいと願っている感じが伝わって来る。さっさと自分の部屋に行きパジャマを持って来て着がえようとする。母に注意され隣の部屋で着がえる。動作はカンマン。脱いだ服はきちんと始末する。いつも持っているというお菓子の包みを抱えて戻る。お菓子を食べる事に熱中。時々質問に答えるが非常に早口であり、オーム返しが多い。体を前後にゆする。急に立ちあがり側にあったオルガンをたたく。4時になるとテレビをつけ幼児向けの番組が始まると、部屋の中を歩きまわり時々強く足をふみならす。何もする事がなく自分や、時間をもてあましていくという感じがする。坐る位置、客に卓上の食べ物がなくなるまですすめる等パターン化した行動は生活の随所にみられる。母親もそれを変化させることからおこるトラブルを恐れ、常に先回り先回りしての生活である。

現在は施設への入所を希望、それを待ちながら福祉作業所に通うには通っているが作業にはむらが多く、本人にとって決して充実した生活とはいえないのが現状であ

る。

3) 症例C

このケースは3才11ヵ月の時、入園テストを受け、かねがね少し変わった子どもだとは思っていたが、園より当所での相談をすすめられ来所したものである。

当時、母親との関係が非常にうまく行っている事、当方に本児を受入れる適当なグループがなかった事などから必要に応じ母親との面接を続け今日に至っているケースである。

昭和27年生、男児、父は開業医であり、母と妹、父方の祖母の5人家族。

克明につけられた母親の育児日記を読むと、確かに所々にその片鱗を伺わせる行動特徴を拾うことはできるが、いずれもその年齢の子どもにはしばしばみられるものであり、果してそのことのみで異常といってしまって良いかどうかは疑問の残るところである。ということは少しづつのかたよりを示しながらも、本児の発達の手度はかなり順調なものであったといってもよいことであろう。

幼児期の主な発達をひろってみると、

1歳……なじみのない新しい洋服や靴をはかせようとすると大変気味悪そうに嫌がる。

1歳3か月……ひとり歩き。

1歳11か月……CMに興味を持つ。一人遊びが得意。発語。人まねがみられる様になる。

2歳8か月良い事と悪い事の了解はよく、母の顔をみて「これは子どもは駄目ネ」等と口の中で反復している。

2歳11か月……自動車に夢中になる。父親を非常に好む。

3歳2か月……2歳8か月頃みられ、その後なくなっていた道をこわがる事が再びみられる様になると同時に、電灯、帯、羽織の紐等をこわがる、近所の子どもとよく遊ぶ。

3歳4か月……バナナの皮をむきながら、「バナナがゲラゲラ笑っている」という。妹誕生。

3歳7か月……よく公園に行くが1人で遊んでいる。家の中のあちこちに紐をはりめぐらし色々な物をぶらさげ、それをテントンテントンと命名。天井についている電灯線の元の金具を、「パーシマル」と称してこわがる。なぜ朝になったら又夜が来るのか等、自然現象に対する質問が多くなる。屋根の勾配に興味を持つ。△をアーサ、△をターン。▽をジンマシマなどと勝手な名称をつけ、それ等を正確に使いわける。

3歳11か月……幼稚園の試験に行く。甘ったれでいう

事をきかない自己中心的なおばあちゃん子の最たるものと評される。好きな事と嫌いな事がますますはらきりして来る。

当相談室で知能テスト施行。IQ89。言葉の抑揚に特徴があり、問題の主旨の理解が悪い事等がテスト上の印象として印されている。

当時の本児への扱いとしては、大人の常識をそのままあてはめ、ただのわがままとみてしまわないこと。本人の気持や行動を理解しようとする態度こそ大切である事を強調。この指示はそれまで何とかしなければと考えながらも、いう事をきかず事が出来ず、仕方なく子どものペースにまきこまれてしまっているという現実のなかで、ややもすれば不安定になりがちな母親に、それで良いのだという自信と安定感を与え、具体的な扱いとしてはそれ程変らなかつたが、この母親の気持の安定は両者の間によい影響をもたらしたようであった。

普通幼稚園卒業後、普通小学校に入学。「学習にはついて行けると思うが、嫌な事があると音楽室のピアノの下にもぐりこんでいる等、理解に苦しむ行動が多い」という事で担任より精神科への受診をすすめられる。精神科受診。脳波検査の結果異常なし。一応精神科医療の対象ではないという事で診断書が出されたが、担任に異常とみられた事が母親の気持を硬化させ、小学校1・2年は必ずしもよい適応とはいえない状態であった。3年生になり担任が変わる。この先生が本児を非常に面白い子どもとみてくれた事が、本児の人間関係を急速に改善させた様であり、学校以外での友達との交流もみられる様になる。ただ、そこにも持前の気まさはあり、ある時は毎日毎日これまでの友達なしの生活などまるでその様に思える程、遊んでいたかと思うと、突然まったく外へ出なくなり友達が家に遊びに来る事も嫌う様になるという状態がくり返された。そのあまりの急激な変化に、何とか本児の気持を理解したいと、母がその気持の説明をしつこく求めたところ「どうしてだか自分でもわからない、でもそうしたいのだからさせておいて、きつとまた変わるよ」と答えたという。

その後、この調子で行けば、ますます心配はないのではないかと、明るい希望の持てる2年間であったが5年生になり再びあまり気の合わない担任に変る。担任から注意を受ける事も多く全体に沈滞気味だったのを、3学期に入り骨折したのを機会に休むことでのり切る。と同時に中学への受験勉強を始める。6年生で再び担任が変わり、本児との関係というよりむしろ母親と担任の関係が非常に良くなり、それが本児にも良い影響をもたらした様であった。受験勉強は、非常に好調に進んでいると

思うと、受験を考える事などまったく無媒としかいえないような時もあり、家族中が本人の調子に翻弄された1年間であった。

母親は非常に論理的であり、本児の問題に対処する時も、論理的に問題を解決しようとした様であったし、本児にもそれを要求した。本児の父親へのあこがれは、父親と同じ職業につく事を希望するという形となつてあらわれ、「あなたがなりたいと思っている医者になるためには国家試験に通らねばならず、国家試験を受けるためには大学の医学部を卒業、大学に入るためには高校、中学……」と順をおって今の勉強につなげる事が、やり気を失っている本児のやる気をおこさせる特効薬となった。

中学校は都内の有名私立校を受験。合格した事はクラスの皆を驚かせたという。その時も本人は合格を別に喜ぶでもなく、むしろ当然のこととして受けとめていた様で、その自己中心的な状況把握に家族も本質的に幼児の頃と少しも変わっていない本児をそこにみて愕然としたという。

中学2年生になり、野球部に入部、へたではあるが実に真面目な部員態度であり、夏の合宿から帰宅した時は、家庭での日頃のだらしなさから、どんな生活をと心配していた母親に、今までの自分がいかに協調性がなかったかを知った事を告げ「これからは、それをなおして行かなければならないと思う」といった事が報告されている。

学業の面は、相変わらず小学校の時にみられたムラが続く、ここでも医者になるためという特効薬が大分使われた様であるが、小学生の時とは異り、やる気をおこさせるきっかけが増えたことは見逃せない変化であった。即ち、不得手な幾何は担任の教師から心配のあまり、家庭に電話があった事が、「先生そんなに心配してくれていたのか」という言葉と共にやる気を起こさせたし、英語は、父と共にボクシングの世界選手権のテレビ中継をみていた時、「英語ができなければ、ああいふ有名な選手の話もきく事ができない」という父親の何気ないつぶやきがやる気をおこすきっかけとなり、それ以後は毎回70～80点をとるという。しかし時間の配分の困難さ、例えば単語を覚えるために単語帳を作りはじめるとそれをきれいに作る事に熱中してしまいおぼえる時間がなくなってしまう等が試験での得点を難しくしていることが学習への両親の参加を余儀なくし、試験が済んだ時には親子共々たくただったという。こんな生活がいつまでくり返されるのか、なまじ手をかす事が本人の自律をおくらせているのではないかと考えつつも、手をひいてしまえ

ば進級もおぼつかないという現実が、手をひく事もかなわず、将来への見通しもたたぬまま、こと学習に関しては手をかき続けるという重苦しい毎日が続く。しかし、それも妹の中学受験を前に母が、「かわいそうに、兄が手がかかるので勉強をみてあげる事も出来ない」といっているのを知り、「ぼくは1人でやるから妹の勉強をみてやって下さい」と宣言して以来好転。一方、小学校以来の経験で教師との関係をよくするため、毎々に母親が教師との話し合いを持った事が、母親の過保護と非難する教師もいたかわりに、それによって本人に対する見方を変えてくれて教師もいた事にささえられ本児は今やうやく1人歩きを始めた様である。

3. 考 察

症例A・Bは性及び若干の年齢の違いこそあれ、自閉的な子どもに対する教育の方向の基本的な考え、それに伴う日常の扱い、及び予後の状態に対照的な違いをみせた症例である。

症例Aでは、受入れを中心とした扱いが、これ等の子ども達に対する治療の基本的課題である人間関係を育てて行く上で、まず必要とされていた時代に、まわりの大人の望む人間像に少しでも近づけるべく、まさに正反対ともいえる訓練がいられている。ひもを1日中ふりまわしている子どもの姿を、本来あるべき子どもの姿ではないと考えたと同時に、そんな毎日しかない子どもにだけはしたくないとの母親の願いが結果された結果であろう。

しかし、症例Bにおいても又他の多くの例でも、その日常生活の中に強制がまったくなかったわけではない。が、そのいずれもが本人の烈しい拒否、あるいは二次的な障害の発生によって引きさがらずを得なくなっている現実がある。その様な中でなぜ症例Aがその様な事態に追い込まれることもなく1つの成果をあげ得たのか、確かに本児の顔は決して生き生きとしているとはいいいがたいし、いつつけられた仕事を済ませた後、次の仕事が表示されるまで、まったく何もせずただウロウロと歩き廻るが、椅子に坐ったままであるのをみた時、そこに何の問題もないといい切る事に出来ない。その自発性・主体性のなさがある人は二次的な障害とまではいわないまでも、まわりの大人によって作られた問題行動であると指摘するかもしれない。しかし症例Bにみられる何もすることのないというかしようにせず、むなしい時の流れに身をゆだねている状態に、むしろ人間としての苦しさを感じるのは、そこに筆者の価値感が入るためだけなのであろうか。人間の存在とは何であるのか、果して症例B

が自分自身の中に現実への存在感を持ち得ているのか。そして母の命令によって動く症例Aにおける存在感とはいかなるものであるのか。あらためて問いなおしてみなければならぬ問題であろう。その様な状況の中で彼等が非現実的な行動をとりやすい事は容易に想像できるし、それが具体的な行動としてもらった場合、そこに生ずるであろう社会との軋轢は彼等をますます不安に陥入れ、現実から遠ざける事もまた想像にかたくない。そしてその具体的な例を症例Bにみた時、一概に自発性のなさだけを指摘し子どもの状態を無視し、そこに至る経過のすべてを否定し得ないものを感じる。

症例Aにおいて次に検討しておかなければならないのは、二次的な問題行動をおこすことなしに訓練に一応の成果をみた事実であろう。そこには純粋に本人のためという、ひたむきな母親の本人への注目があり、それが実にこまかい段階をふんでの訓練であり、強制であったことを見逃してはならない。あいまいさの中で生きることの不得手な彼等に、徹底した一方向が、それも具体的に示された事は、むしろ症例Aにとって安定を約束するものであったのかもしれない。今後この様な経過の中で自発性をも育てる事の工夫がなされて行かなければならないであろう。

症例Cの予後が現在のところ良好といえる経過をたどっている原因としては、まず本児の本質的な知能の高さと自閉性の軽さをあげることができよう。それは乳児期から幼児期にかけての発達の様相が、それ程大きく標準から逸脱していないことから伺い知ることができる。Bosch, G. も5歳時の言語の存在は非常に役立つ予後の指標であり、IQと予後との密接な関係を指摘している。即ち、follow up した20名のうち比較的良好な予後を示している7名はいずれもIQ90以上の症例であり、予後が明らかに不良なもの8名のうちIQが50以上の者は1名もいなかった事を報告しているし、Rutter らもIQテストに対する子どもの反応を重視している。となると、

症例Cが示した3歳11か月の時に行った知能テストがIQ89という結果は、良好な予後を予測し得るに十分な数値である。しかしそこに本児の持つ能力を最大限に引き出した母親及び本児をとりまく家族の本児に対する扱いを無視することは出来ない。感情を交えず理屈で納得させるというやり方、及び症例報告のところでは割愛したが本症例の家庭教師、チェロ学習など本人を受入れ、本人の個性を面白いと見てくれた人々との数多い出会いがあったことが本人の成長を助けてくれている。

そして更に、本児が将来に対する目標を持っていた事

が、他の症例とは大きく異なる点である。Kanner もその論文の中で—予後の良い症例は不良例と異なり、10代中頃に彼等は自己の風変わりさについて不安のうちに気づく様になり、彼等が一般的に期待されていることを義務として自覚するようになり、適応するために意識的な努力をしたとし、このような自己概念の社会適応の方向への漸進的な変化の過程を特徴の1つとしてあげている—以上若林慎一郎氏の論文からの引用—と指摘しているがまさにその言葉を裏づけるものであろう。将来への目標を持つこと、期待される自己の把握など、それ等を得られること自体、能力に関係があるといってしまうばそれまでであるが、自閉的な子どもの成長を考える場合、とかく判断しやすい教科学習の出来、不出来で云々されがちであるが、その事への大きな警告も与えるものであろう。

現に症例Bも幼児期において、それ程将来を悲観しなければならぬ程のケースではなかったが、小さい子どもを怪我させたという一事が、母親の気持をくじかせてしまっている。小さい子どもへの攻撃が何を意味するのか、それは先にも述べたように非現実的ともいえる現在の生活と決して無関係ではないであろうし、すでに幼児期においてみられた破壊的な行動、気に入らないと癇癪をおこし容易に気分を変えることができないという気性の烈しさやかたさと源を1にするものなのであろうか、母親のトラブルをさけようとしての日常生活の中でのあまりに先廻り的な事態への対処の結果なのであろうか。

もしそうであるなら、幼児期において同じ様な問題のみられる子どもに対して今後どの様なアプローチが必要であるのかが早急に検討はされなければならない問題であろう。

受入れを中心とした治療がすすめられていた時代に、その幼児期・学童期の大部分を過した子ども達が思春期を迎えるようになった今、そのセラピーが批判のまとなっている。確かに社会によりよく適応しようとする気持の稀薄な彼等に、又自閉症を人間関係の障害として、関係療法にのみ頼った治療方法には限界があったようである。しかしそれは即、従来のプレイセラピーを否定するものでは決してない。従来のプレイセラピーを否定するものによって症例Aはむしろ拍手を持ってむかえられる症例であるかもしれない。しかし、そこに本人の成長を助ける実にこまかい適切な階段をふんだプログラムがあったという事で証明される母の子の強い結びつきを見落してはならない。更に、多くの異った点を持つ三例ではあったが、その中で共通していえることの1つに教師との出会いが彼等に大きな影響を与えているという事をあげることが出来る。担任との関係がうまく行っているか否かが、子どもの状態の良否にそのまま反映されているとの感さえある、ということは母親についても彼等を取りまく人間すべてに同じような事がいえるわけであり、あくまでも彼等を理解し、受入れる人間関係が土台でなければならぬ事を示すものであろう。